〜〜〜

日本ギャスケル協会

第 32 回大会

2020 年 10 月 10 日（土）Zoom によるオンライン方式

〜〜〜

13:00　開会の辞　　日本ギャスケル協会会長　大野　龍浩　（立正大学教授）

13:05〜13:35　研究発表１　　司会　大田　美和（中央大学教授）

「“Bran”　——ウィリアム・ギャスケルによる伝承詩の翻訳」

長浜　麻里子　（東京農業大学非常勤講師）

13:35〜14:05　研究発表２　　司会　木村　正子　（岐阜県立看護大学准教授）

「法廷内から法廷外での戦いへ

——*Mary Barton* のメアリと *A Dark Night's Work* のエリノアを中心に」

矢野　奈々　（早稲田大学非常勤講師）

14:05〜14:15　break

14:15〜15:35　シンポジウム　「キリスト教で解読するギャスケルと G・エリオット」

「The Plan of Salvation in *Scenes of Clerical Life* and *Cranford*:

A Quantitative and Qualitative Analysis」

司会・パネリスト：大野　龍浩（立正大学教授）

「『アダム・ビード』と『ルース』における罪の赦しと執り成しの祈り」

パネリスト：村山　晴穂（元三育学院短期大学教授・元桜美林大学非常勤講師）

15:35〜15:45　break

15:45〜16:15　総会

16:15〜16:25　break

16:25〜17:25　講演　　司会：松岡　光治　（名古屋大学教授）

「ギャスケルとチャリティ——産業都市マンチェスターの言語空間」

大石　和欣　（東京大学教授）

17:25〜17:30　閉会の辞　　日本ギャスケル協会副会長　松岡　光治　（名古屋大学教授）

本大会に関する問い合わせ：日本ギャスケル協会事務局

〒422-8545　静岡県静岡市駿河区池田 1769　静岡英和学院大学短期大学部　芦澤久江研究室

E-mail：ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp

梗 概

研究発表

「“Bran” —— ウィリアム・ギャスケルによる伝承詩の翻訳」

長浜麻里子（東京農業大学非常勤講師）

“Bran”（1853）は 16 行の散文解説が付記された全 114 行のバラッドであるが、この作品に触れているギャスケル研究は少ない。長らくギャスケル夫妻の共同執筆であるとされてきた一方でウィリアム作と記している研究書もある。しかし、2018 年 5 月、ギャスケル研究会において、発表報告者として詩の形式や内容を分析させていただいた結果、これは少なくとも夫婦の共同執筆ではなく、ブルターニュ地方に伝わるブルトン語の伝承詩をウィリアムが翻訳したものではないかと判断するに至った。実際にその後、この作品はブルトン語のバラッド集 *Barzaz-Breiz* の中の一篇をウィリアムが翻訳したものであると *Dickens Journals Online* に記されていることが判った。本発表では、作品の内容を紹介し、実際に詩を精読することで、この詩が夫婦の共同執筆ではなく、ウィリアムの翻訳詩であることをあらためて論証するとともに、その上で夫婦の共同執筆と見なされた理由について考えてみたい。

「法廷内から法廷外での戦いへ——*Mary Barton* のメアリと

A Dark Night's Work のエリノアを中心に」

矢野奈々（早稲田大学非常勤講師）

ギャスケルの作品において、度々裁判場面が描かれています。今回の発表では、裁判場面を取り扱った作品の中で、*Mary Barton*（1848）と *A Dark Night's Work*（1863）を主に取り上げ、ヒロインの法廷内での戦いから法廷外での戦いへと変化していったその意味について、当時の女性と‘public’をキーワードに考察していきます。*A Dark Night's Work* のヒロインであるエリノアは、父の罪を隠して生きていくことや、正しい真実を証明しようと勇敢にも証言台に立とうとする点で、メアリと境地が似たヒロインとして見ることができます。しかし、エリノアの場合は船のエンジントラブルによって巡回裁判に間に合わず、証言台に立つ事ができませんでした。ところが、彼女はかつての恋人コーベット判事と直接話をし、最終的にディクソンの処刑の令状を持っている司法長官にコーベット判事から赦免状を送らせることに成功します。エリノアの戦いは法廷外（厳密に言うとコー

ベット判事の家）で行われましたが、なぜこのような設定になったのかについてもメアリと比較をしながら論究します。

シンポジウム

「キリスト教で解読するＧ・エリオットとギャスケル 」

英国 19 世紀写実主義小説の泰斗 George Eliot と Elizabeth Gaskell。その文学をキリスト教を視点に分析するとき見えてくるものは何か。各々の主要作品を題材にして比較する。

「『アダム・ビード』と『ルース』における罪の赦しと執り成しの祈り」

村山晴穂（元三育学院短期大学教授・元桜美林大学非常勤講師）

『アダム・ビード』は、叔母のエリザベス・エヴァンズ（福音伝道者）が 1802 年にノッティンガムの巡回裁判で死刑の判決を受けたメアリの為に熱心な執り成しの祈りを捧げ、回心へと導き、メアリは天国を確信して亡くなるキリスト教史実に基づく。この実話に感動して、エリオットは、1859 年、孤児のヘティという女性を含めた話に脚色して、この最初の長編小説を著した。原罪を負ったアダム（創世記）になぞらえて題名とした、利己心と愛他性を対比させたこの作品をヴィクトリア女王は絶賛した。他方、『ルース』（1853）では、出産した子を前に罪の告白をするルースが、ベンスン牧師等の支えにより、自他共に執り成しの祈りに支えられ、献身的な生涯を全うする。『ルース』の「結び」では、受難を経て、罪の赦しを得て「衣を小羊の血で洗い、白くした」経験をした者達の天国での様子をベンスン牧師が聖書の黙示録から読み上げる。19 世紀の両作品から、罪を覆う愛アガペーと兄弟愛（フィラデルフィア・黙示録 3 章 12 節）の意味を再考察していく。

「The Plan of Salvation in *Scenes of Clerical Life* and *Cranford*:

A Quantitative and Qualitative Analysis」

大野龍浩（立正大学教授）

「総合年代記」と「デジタル人文学の手法」による作品構造の分析により浮き出される物語の焦点に注目し、「神による人類を救うための計画」の観点から、語り手を含む登場人物の言動に表れたキリスト教観を吟味する。

表題の２作品を比較対象に選んだのは、田舎を舞台に庶民の日常生活を淡々と描くことに焦点が置かれているので、人々の普段の宗教観を知るには好都合に思えたから。

人間模様の一断面を切り取る写実主義小説の端々にこの思想が見え隠れするということは、すなわち、宗教の捉え方は違えど、両作家にとって、意識していようがいまいが、それは人生の真理を内包するものだったのではないか。

講 演

「ギャスケルとチャリティ――産業都市マンチェスターの言語空間」

大石和欣（東京大学教授）

本論では、女性とチャリティという観点から、エリザベス・ギャスケルの『メアリ・バートン』『ルース』『北と南』を読み直す。夫ウィリアムがマンチェスターのユニタリアン派牧師補だったギャスケルは、ユニタリアン派の社会的・政治的見解を色濃く反映しつつ、女性作家独自の視点を通して女性と産業都市における生活・社会環境との関係をつぶさに描く。それが端的に浮かびあがるのはチャリティというテーマである。この時代の中流階級女性にとって、女性の本分とされた家庭領域から大きく逸脱することなく、活動領域を公共圏にも拡大できたのがチャリティであった。それは共感の問題でもあり、小説家にとっては言語の問題でもあった。ユニタリアン派におけるチャリティや共感の理念を捕捉し、同時代の貧困や労働者の生活環境といった文脈のなかでギャスケルの言語を位置づけることで、「産業小説」あるいは「リアリズム」として統括されがちな彼女の小説群の新しい位相を探りだしてみたい。